

観心寺僧形坐像再論—唐代禅宗史の立場から

松原瑞枝（同志社大学）

真言宗の古刹観心寺には、元慶7年（883）成立の『観心寺勘録縁起資財帳』に「唐聖僧像」と記述される、中国唐代の僧形坐像が伝来している。日本で「聖僧」としてのみ受容されてきた本像は、山名伸生氏によって千手寺像、善願寺A・B像、そして米ミネアポリス美術館蔵の僧形坐像という4点の類例が示されており、各法量・構造の一致、胡貌梵相と漢人相の区別などから、一具の天台/密/禅宗祖師像として造像された可能性が指摘されている。

発表者は昨年、山名氏の論を更に進めて、これらの僧形坐像群は北宋嘉祐6年（1061）成立の禅宗史伝書《伝法正宗定祖図》に表されている禅宗祖師群像と、師弟が相対する姿勢、視線の高低差、胡跪坐などの点で強い親近性を持つことによって、禅宗祖師像である可能性が高いことを明らかにした（「観心寺僧形坐像の平安仏教美術史上の意義について—禅宗文脈を手がかりに」『美学芸術学』32号）。さらに、唐で制作された本像が真言宗寺院に伝来していることを踏まえ、①観心寺と関わりの深い嵯峨天皇皇后橘嘉智子が唐僧義空を招聘していること、②義空は禅僧であり、当時禅宗で伝法祖師信仰が高まっていたこと、③義空が当時中国仏教界に甚大な被害を齎した会昌の廃仏を避けて、日本にこれらの像を持ち込んだ可能性が高いことを指摘した。しかしながら、この論証は、観心寺像を含むこれら5体の坐像群を禅宗文脈に位置付ける上では必ずしも十分ではないと思われる。

そこで本発表では、本坐像群の図像と義空関連の史料および先行研究を改めて考察した上で、前回の論で不足していた点を補い、結論の蓋然性を高めることを目的とする。

そのために第1章では、観心寺像を含む僧形坐像群を、《伝法正宗定祖図》および至和元年（1054）成立の図像である高山寺蔵《達磨宗六祖像》と比較することによって、これらの諸像が禅宗祖師像と図像的に非常に近い関係にあることを確認する。第2章では、改めて観心寺像の歴史的な文脈を検証し、①観心寺と橘嘉智子との関係、②義空の禅宗における立場、③当時の中国における廃仏の状況、という3点を確認する。第3章では、①②③を補強する間接的な証拠に言及する。すなわち、①については、『本朝高僧伝』において嘉智子のみが禅に深い理解を示していたと語られること、②は、義空宛の書簡『高野雑筆集』において、義空は中国で仏法僧の三宝紹隆、つまり仏像の造像に関わっていたとされること、③は、同雑筆集の中で、如意や幡など僧の威儀を示すものが義空に贈られており、同様に彫像も齎された可能性が高いこと、そして『歴代名画記』や各請来目録等によれば、中国唐代において、僧形の絵画・彫刻が多く制作されていたこと、などである。以上の考察により、本像を含む坐像群は密教の時代に齎された最初期の禅宗祖師像である蓋然性が高く、平安時代における禅宗文化の流入を考えるうえで重要な像であると結論づける。